

戰鬪的佛典の溯源的研究

斷戒體章と摧邪輪

井 上 右 近

筆者住所移轉の際、『出定後語』の續稿に關する資料の移送遲延し、餘儀なくこの臨時的一篇を草することゝした。

關西論壇の魔神的鬪將藤井艸宣氏は『京都美術新聞』九月一日號で「記者は十字架にかゝれるキリストを以て萬人の罪を贖つてくれたのだといふが如き虫のいゝ神學にも與し得ないと共に、キリストは萬人に十字架にかゝれと示せりと解する西田天香氏や綱島梁川氏とも同感することゝができない。又た斯くの如くキリストなる神のひとり子を地上に送れる造物主の創造説や最後の審判説を不

合理極まる神話の妄想だと思ふ」と論ぜられた。全く同感である。不合理極まる神話の妄想と感ぜしむるは言語的敏感である。エリエリサマラバクタニといふキリストの絶叫は我等にオンナボキヤペーロシヤナ陀羅尼にすぎぬのである。「うつくしきあがなせのみこと、かくしたまはゞみましくにのひとくさ、ひとひにちかしらくびりころさむとまをしたまひき、こゝにイザナギノミコト、のりたまはく、うつくしきあがなにものみこと、みましかくしたまはゞ、あれはや、ひとひにちいほうぶやたてゝむ、どのりたまひき」といふ『古事記』

の言葉はアメリカ人にとつて不合理極まる神話的妄想かも知れぬが、「日本語をばなす日本人」われらにとつては何よりも合理的現實的確信を語るものである。

これを千人死せば千五百人生むといふ教義に抽象してそれがニツポニズムであると説かれたとしたら、誰よりも先づ吾等はそれを否定する。古事記の言葉のリズムに總攝せらるゝ發展の勤勞的彈力と人口増殖率とは不可分離である。

もしアメリカ人が眞にこの古事記の思想的生命にふれたならば日本人の加洲に於ける勤勞に相當の感謝をしてその人道的合理感を満足せしめ得るであらう。が事實はさうでない。

アメリカ人に日本人の至情を披瀝するものは日本人の日本語の現實であつて論理主義的辯疏ではない。

佛教！ 佛教とは現實吾等國民にとつて何を意

味するやを考へやうと思ふ。古典の調査的研究といふことは結構のことであり、またその業務のたえざることを信ずる。佛教は印度に發祥した文化である。釋氏の談話とその遺弟の告白とである。

それを日本人に一瞬に信受せしめ普遍化したのは親鸞の「ナムアマミダブツ」であつた。日本人の佛教は「ナムアマミダブツ」の形式と同一念佛無別道の確信内容とに究竟せしめられた。こゝに「去とは釋迦佛なり來とは彌陀」とも「釋迦の遺教かくれしむ彌陀の悲願ひろまりて」とも「和國の教主聖德皇、廣大恩德謝しがたし」とも簡單總攝せられたのであると信せしめよ。

この簡單總攝原理の自覺なしに「個的につきたち知識により研究仲間たらんと」した過去をこばくの佛教學者の言論の史的價值を今こゝに紹介しやう。

德川中期の佛教學者護信は『斷戒體章』を著して自ら誓受一切學處菩薩といふ肩書をつけた。先づこの肩書を分析しやう。人生は不可思議である。不可思議をそこばくの可思議に概括せしめた形式を學といふべきであらう。それゆゑに學は「やむを得ざる誠」である。自ら進んで學ぶといふは進んで學ばざるを得ざらしむる實人生の要求である。「我取瑜伽語。稱誓受一切學處菩薩。以自警策。要不失菩薩之行也。名之資行。固不鮮矣」と自傳するより見ても誓受一切學處云々といふ肩書が自己策勵的であつて人生を痛感しての自覺のいさみではないことに氣づかしめられやう。

●●●●●
 田中智學氏が『改造』誌上で『大義名分』論を持出し日蓮の「一切事ニ互リテ名ハ大切ナリ」といふを用せる如きもこれと同様の心理である。「日本語をはなす日本人」にとつては日本は疑ふべからざる内心の事實であり史的生命である。支那流大義名

分觀を以てこの生命を保持せんとするときにはまことに迂遠の誓であるといはねばならぬ。

「人生とは戦ひであるか」とめさめしめよ。さうめさめずに自己策勵的戦闘に心をうばゝるときに陥るものは戒律思想である。戒律思想は實は無慚愧思想樂天思想辯疏思想である。それはまた迷信思想であり唯物思想條件思想である。「菩薩結勸曰。儒家所謂命也時也。以我視之、靡非業因緣矣。業因緣。我門宗要也」業因緣を痛感せずに業因緣を宗要とするはあきらめ思想である。「推諸己寔信然矣。何其不謹焉哉。何其不懼焉哉。戒善堅護。戒德必報而已矣」といふ戒善堅護戒德必報などは、いふどころの「時」を無視せしむる自障々他思想である。おのれ一人の世界ならば知らず今世間虚假と痛感せしむるに常流轉あるのみである。俱舍論に説明さるゝ有部哲學の如く我等の生命が自然科学的に規定され得やうか、自然科学的法則なきを

精神科學的法則と見たヴントの生命的實驗實感に
吾等は其鳴せしめらるゝ。

護信が「月支論師。或未盡矣。支那釋家。全無
領會者。寥々千數百歲。于今都無其人也」などい
ふ意氣には愛すべきものがある。いつまでも印度
支那の糖粕に甘んぜずといふ「屈從より解放」の
啓蒙的精神を充分に認めしむる。しかしまことの
「屈從より解放」はひとりよき人の言葉に信順する
結果であるべきでその道程ではなからう。まこ
との啓蒙は教育である。求道の啓蒙化を轉換せし
めて宗教の教育化と信知せしむるときに希有の信
海は開闢せらるゝのである。

世人舉惑。則無_レ有_レ知_二其惑之爲_レ惑者_一矣。或
恐_二見其不_レ惑。而乃爲或也。雖然。我爲_二他笑_一不
損_二其鼻_一矣。などは戒律思想の諧謔的要素を示
してゐる。世人舉惑といふごときことはあり得ぬ
ことである。もとより世間虚假と痛感する吾等に

とつて「面々の御はからひ」なるべき他人のことは
わからぬのである。それゆゑに心理學をにおいて社
會學はあり得ぬのである。ヴントの民族心理學が
大戰に臨んで社會學を扱ふにいたつたことも味は
うべきであらう。直觀をにおいて認識はあり得ぬ。

「請。諸學者。不_二爲_レ名所_一惑。平心細意。熟解
本文。凡原本究源。固學之急要也」といふ。原本
究源といふことゝ熟解本文といふことゝは不可分
離である。「乃往若有_二原本究源者_一。幸指畫後世。
當_レ無_二今日之弊_一。今日若有_二原本究源者_一。幸懷_二斥
舊執。當_レ救_二今時之弊_一」といふ。言葉は生命であ
り生命を傳ふるものは言葉である。もしこの護信
の思想が單に學のため處生のためであるならば無
意義である。何となれば山鹿素行は親鸞の著者を見
なかつたけれどもその聖德太子觀についてま
たその原理感に於ても符節を合す如くであつた。
それは史的開展の生成的不可思議である。人生は

一瞬もその原本究源のこゝろをすてしめぬのである。一瞬の不斷開展を名づけがたくして今吾等は「祖國」と名づけしめられつゝある。斷戒體章の批評はこれ位で止めやう。

『中央佛教』九月號で詩人蒲原有明氏は「懺悔の機縁としての聖道教」といふを發表して居らるゝ。その最後にも證せらるゝ如く賢首大師の「因即普賢解行。及以證入果即十佛境界。所顯無窮」といひ「唯智境界非事識。以此方便會一乘」といふごとき言葉は何だかゴテ／＼として居つて、親鸞の「悲願の一乘歸命せよ」といふ簡單總攝の言葉には比較にならぬのである。まことに論理主義は厄介のものであり面倒のものである。

梅尾の明恵上人といはるゝ自稱「華嚴宗」高辨の『摧邪輪』を繙かう。くはしくは『於一向專修宗選擇集中摧邪輪』と題せられてゐる。全文の要旨は

異學異見を否定する念佛はいけない。異學異見を肯定する吾等の念佛が本當の念佛だといふにある。これは日蓮の念佛無間云々と對破的態度に出でた思想に比して女々しさを感ぜしむるのみである。

「夫佛日雖沒。餘暉未隱」全く作文のやうである。餘暉とは事實何を指示するや「法水雖乾。遺潤尙存」も同じである。「三印分邪正。五分別内外」といふ。教義や戒律は言語風俗習慣と切離すべからざる史的概念である。「我等依之。嘗甘露。醒毒醉。良如聞梵音。似對金容」などは偽善的感傷である。諸行無常。諸法無我。涅槃寂靜などいつてそれに内容と與ふるならば要は自見にすぎぬものである。「梵音を聞くがごとし」は巧妙の美辭である。まだ／＼序詞は長いが倦怠してしまつた。

一、撥去菩提心過失 二、以聖道門警群賊過失と標出して居る。「菩提心」といふものがあると思

つてゐるのが高辨自身の過失であり、自分は聖道門であると自惚るゝが故に選擇集の譬喩が腹立たしくなるのである。その一例をあげやう。

「既云各發無上心。不云各稱彌陀佛。云同發菩提心。不云同稱彌陀名……」といふごときそれである。「彌陀佛とは自然のやうを知らせむれうなり」とは源空の言葉を信受した親鸞の告白であつた。こゝに直觀と信との同じきを暗示せしめらるゝ。

明恵上人とならび稱せらるゝ笠置の解脱上人即ち法相宗貞慶は『興福寺奏狀』の記者であるといふがその念佛の九失といふは立新宗失、圖新像失、輕釋尊失、妨萬善失、背靈神失、暗淨土失、誤念佛失、損釋衆失、亂國土失、とある。この中代表的なのは輕釋尊失、背靈神失であらう。さういふ解脱上人の『愚迷發心集』の序詞は「敬白十方法界一切三寶日本國中大小神祇等。弟子五更睡寤而。

寂莫床上。双眼浮泪而。情有思連」といふ如き感傷的言葉である。「佛教」と「鎮護國家」思想とは表裏をなすものである。こゝに親鸞の自督無窮の生命を對照強化せしめらるゝのである。

吾等はこの對照に生くるのみである。人生は戰である。信知せしむるが故に異學異見別解別行をきびしく選捨せしめよ。たいそれだけである。

▲新刊▼

○華嚴學綱要

齋藤唯信著

○華嚴經要義

脇谷搗謙著

右二書は次號に紹介批評する